



## 白井義昌教授

専門：理論経済学

国際経済学

(インタビュアー：関川 亮)

### 「専門は労働市場の動きを考慮した経済動学モデルの構築と分析」

#### Q. 白井先生の専門とされている研究内容について教えてください

今研究所でやっていることとして、マクロ経済学の労働市場の動きを考慮した経済動学モデルを構築して分析するというのが狭く言えば専門ですけれど、興味の範囲は広いです。

### 「国際貿易のために取り組んだ様々な学問と広がった興味」

#### Q. そのような研究をしようと思った経緯を教えてください

私が所属したゼミの先生の専門だったということもあり、国際貿易にすごく最初関心がありました。当時は80年代でしたけれども、規模の経済性が国際貿易理論に導入され分析が進みました。市場構造の分析と言われる企業間の駆け引きなどの問題を扱う研究がすごく盛んにおこなわれていて、どうしても国際貿易をやるうえで産業組織論をやらなければなりません。その産業組織論で用いられる分析道具として、ゲーム理論を勉強しなければいけないということもあり、学部から大学院1、2年にかけて産業組織論とかゲーム理論とかを勉強するようになりました。大学院の修士の論文は、産業組織論と国際貿

易を混ぜたような、研究開発の国際競争の理論などということをやっていました。その後、アメリカのノースウェスタン大学に留学して、動学モデルというのでしょうか、経済成長のモデルだとか、時間を通じたゲーム理論の問題だとかにだんだん興味を持ち始めて、結局、博士論文は経済成長または内生的な経済変動のモデルを構築するというので研究しました。その延長上で、先ほど述べた労働市場の動学を考慮した一般均衡モデルの分析にすごく興味を持っています。

## 「国内経済とは切っても切り離せない国際経済」

### Q. 国際経済学を学ぶことにどのような意義がありますか？

皆さんもグローバル化という言葉でよくご存じだとは思いますが、国内の経済のことを理解するときに、否応なくその他の国の経済活動というのを考えざるを得ないです。国内で例えば起業するとなったときに、国内の同業者だけが相手になるのではなくて、国外の別の同業者や似たようなサービス、新しい技術が国外でどう進歩していくかにも関係するし、日本独自のものを作ったとしても、最近では世界中で売れるわけです。ニッチマーケットみたいな、国内だけを対象にしているつもりが、ひょんなことから世界の裏側からニーズがあったりなどするわけです。要するに、たとえ国内のことを問題として考えるにしても、どうしても国際経済の関わりを考えざるを得ない。国際経済学は必須なのではないかなと思います。

## 「1,2年はサークル、3,4年はゼミが大きかった学生時代」

### Q. 先生の学生時代のお話を聞かせてください

学生時代はサークルをやっていました。音楽のサークル、ジャズ研ですけれども、音楽サークルで演奏活動をしていました。それとやっぱりゼミですかね。ゼミで勉強するということとその二つが大きかったです。大学の1、2年はサークルが大きな役割を果たしていたし、3、4年は圧倒的にゼミ活動が学生生活の大きな部分でした。

## 「学生のモチベーションを喚起できるきっかけづくりができれば」

### Q. 白井先生の教育理念を教えてください

私がゼミの学生に教えるときに重要だと思っていることは、学生が勉強したり、物事をするときのモチベーションだと思います。モチベーションさえあればみんな自分で勉強したり、いろいろなことを探したり、深く読んだりするようになると思います。そういったモチベーションを呼び起こすような材料を提供できればいいなあと思っています。好奇心を持っているいろいろ見たほうが面白いということで、自分自身はどうやって興味をもってこ

ういう風に考えたかというようなことを話したりしながら、なるべく学生がそれぞれ自分の関心のあることを、より深く考えてもらう、続けて勉強してもらうというような、考え方も含めてきっかけづくりができないかなと模索しています。

## 「論文執筆を軸とした3年時の共同研究、4年時の卒論」

### Q. ゼミではどのような活動をしていますか？

どのゼミでも目標は同じで卒業論文を書くことだと思います。論文を書くことは学者の活動そのもので、大学の先生が教えることができるものの中で一番得意なことだと思います。実際のビジネスについて学びたいという人は多いと思うのですが、私を含めて大学の先生はそういうことは不得意です。それ以上にやっぱり大学の先生が一番本領としているのはその論文を書くということだと思います。

でも実はその作業が、ビジネスと共通するところがものすごく多い。潜在的なニーズがすごくあるようなことで、まだみんなが気づかない課題を自分で発見して解決し、みんなに広く知らしめる。自分の研究意義を認めてもらうためにはマーケティングをしなければいけないし、課題を論理的に説明できなければいけないし、発見も科学的にやらなければいけない。いかにクリアに、アピーリングに読者に伝えるかということを常に学者は考えているので、学者である大学の先生からはそういうことを学べば良いかと思います。

その論文を書くときの一番のお手本が、プロの研究者が発表した論文です。この中に実はいろいろと使えるものがいっぱい入っているので、ゼミではそれを学んでもらいたいと思っています。次に実際に論文を書くという活動を、共同グループを作ってもらって、3年生にはそこで共同作業で論文を書くという、論文の中身の部分を研究活動でやってもらいます。そして3年生の最後の時期に、他大学の国際経済学のゼミとその研究成果発表会をやります。これが3年生の主な活動です。4年生は卒論です。それを今度個人で繰り返すという形ですね。

## 「好奇心を持ち、見て、考えてほしい」

### Q. 自井ゼミを志望する2年生に求めるものは何ですか？

好奇心、これに限ります。なんでもいいから好奇心を持って見てほしい、そして考えてほしいですね。「こういうことを教えて下さい」という風な姿勢はちょっと好ましくないかな。「こういう風に面白いと思うんですけど、先生面白いと思いますか？」とか、そういう感覚でゼミの活動に臨んでもらえれば、それが一番ですね。

## 「大学のリソースを活用する学生生活を！」

### Q. 最後に2年生へのメッセージをお願いします！

大学のリソースを思いっきり使ったらいかがでしょうか。リソースは主に三つ。第一は先生です。優秀な方々がいっぱいいるので、自分のゼミの先生ではないからとか、自分が授業を受けた先生ではないからとかを気にせず、自分が興味を持ったことについて関わるような先生に、知りたかったらどんどん話を聞けばいいのではないかと思います。そういう風に使うというのはとても重要だと思います。ただ授業を聞いているのではなくて、目的を持って積極的に先生に聞きに行ったり、「自分はこういうことをちゃんと伝える」ということで、迷惑にならない程度にコミュニケーションをとって、先生を利用することです。

第二はデータベース等図書館と、今もう電子化されていますけれど、色々な雑誌とか書物とかです。この電子化された雑誌もただで手に入るものではなくて、慶應だから相当資金を使って電子データベース等があるので、それを思いっきり使えば、学費なんか簡単にもとがとれると思います（笑）。だからそれはやっぱり使うべきです。社会に出てからそれにどれだけ費用がかかるかをきっと認識されると思うので、今のうちに宝の持ち腐れにならないように資料を使うということです。

第三は、友達ですね。それも人材の一つだと思います。単にリラックスするために遊ぶことも重要だとは思いますが、やっぱり自分が一生懸命考えていることを友達にぶつけて反応を見たりするとか、一緒に活動してみたりするとか、そういう使い方、友達との付き合い方というもの一つあるのではないかなと思います。いろいろと社会活動を一緒にやるとか、すごくいいことをやっている方もたくさんいるとは思いますが。実は今言った3つを同時にやることもできるわけですよ。友達と一緒に先生のところに行って、そういう電子資料を使ってどんどん活動していく。そういう風に学校を使えばいいんじゃないかなと思いますね。

### 【編集後記】

自分の所属しているゼミは国内制度について扱うことが多いため、国内制度との対比という意味で、国際経済というトピックについてのお話は新鮮に感じられた。

また、インタビューでは白井先生ご本人やゼミの活動についてだけでなく、大学の使い方を語っていただいた。昨今、大学の在り方について議論されることも多い中、今回うかがえたお話は非常に参考になり、自分の考えを深める機会になったと思う。このインタビューがこれから入ゼミに臨まれる2年生をはじめ読者の皆さんに参考になれば幸いである。

最後になりましたが、この度は白井先生にお忙しい中、お時間を割いていただきました。この場をお借りして心から感謝を申し上げます。誠にありがとうございました。

文責：関川 亮